

[平成30年度教員研究費特別研究]

# 美術大学における 次世代デザイン教育の在り方に関する調査研究 2

Research on Next-Generation Design Education at Art University 2

北村賢哉 Kenya KITAMURA

村山祐子 Hiroko MURAYAMA

根来貴成 Takanari NEGORO

坂野徹 Tohru SAKANO

## はじめに

変わりゆく社会と共にデザインの役割や期待が高まり、その概念や領域が大きく拡張している。本研究はこの様な状況に対して美術系大学におけるデザイン教育の役割を再定義しようと試みる。様々な情報収集と、それを基にデザイン科教員で活発な論議を行うものである。平成30年度は前年度実施した「美術大学における次世代デザイン教育の在り方に関する調査研究1」を基礎として、国内の主要大学の継続調査に加え、調査範囲を欧州のデザイン系大学まで広げた。また、学内ではデザイン科会議で決定された若手の教員9名で構成されたデザイン科改革ワーキンググループの活動を行った。新キャンパス構想に呼応し、より社会に貢献できるデザイン教育の研究を推進していく。

## 研究の流れ

前年度から継続して全国の主要な美術系・理系大学を訪問し、デザイン教育の現場を調査することにより、一過性ではない各大学の本質的な特徴を掴むことができた。また、平成30年度は調査範囲を海外まで広げ、欧州4カ国の7大学を訪問した。社会や産業構造の変化は日本より欧州の方が早いため、新しい体制に再構築されたデザイン教育の現場を把握することができた。

国内大学の調査活動に海外大学の情報が加わることにより、相対的に本学デザイン科の強みと弱みを俯瞰的な視点で見ること、ようやく次世代のデザイン教育を問う準備が整った。また、これらの成果をデザイン科会議で報告し、メンバー以外の教員に共有することも積極的に行った。この活動がきっかけとなり、デザイン科内に2023年の新キャンパス移転を見据えて将来を構想する機運が高まり、デザイン科改革ワーキンググループの立ち上げに繋がった。

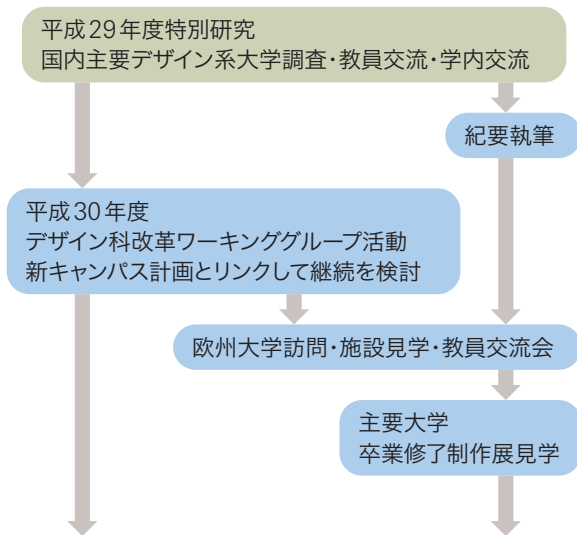
## デザイン科改革ワーキング

「デザイン科改革ワーキング」は我々の特別研究から発展的に生まれた活動である。構成メンバーとして、10年後も本学に在籍するデザイン科教員9名（河崎教授、安島教授、鈴木教授、畝野教授、北村准教授、村山准教授、根来准教授、坂野准教授、下浜講師）が、デザイン科会議の議題として検討の上、選ばれた。本活動の目的は、金沢美大における次代のデザイナー育成に向けた教育体制を構想することである。29年度と30年度の本特別研究の成果を基礎情報とし、ワーキンググループで新たな教育体制の基本構想を議論した。また、平成31年度までに構想の確定を行うことで、その後続く具体的な実行計画へスムーズに移行できるようタイムテーブルを組んだ。方法としては、毎回事前課題に対しメンバー個々が考えをまとめ、口頭または資料として具体案を発表

「デザイン科改革ワーキンググループ」活動一覧

| 日時             | 内容   |
|----------------|--|
| 2018/6/5       | 第1回 今後のMTG形式と日程、Slackの活用に関して   |
| 2018/7/10      | 第2回 大学憲章・活動指針の確認、改革活動に向け個人の考えを述べ共有する   |
| 2018/7/31      | 第3回 個々が発表した改善案に関する質疑応答   |
| 2018/8/28      | 第4回 美大生に求められる21世紀型デザインスキルとは?、ゼミ制に関して   |
| 2018/9/18      | 第5回 ゼミ制運用に関わる課題、質の高い教育プログラムや次世代教育方法、現状業務で合理化や削減できるアイデア検討                     |
| 2018/10/9      | デザイン科会議でメンバー以外の教員に向けて中間報告・ヒアリング  |
| 2018/10/12     | 第6回 今後の入試のあり方について、1年生の基礎授業について   |
| 2018/10/25     | 第7回 環境デザインの将来構想から～「これまで」と「これから」に関して  |
| 2018/11/27     | 第8回 デザイン科を強化していくための合理化策に関して検討<br>(委員会、入試、大学院運営に関して議論し、各委員会メンバーによる分科会として継続検討) |
| 2018/12～2019/1 | 分科会 教務、入試、大学院の各担当者(+α)で強化・合理化に関して調査検討  |
| 2018/12/20     | 第9回 各分科会活動の報告と共有   |
| 2019/1/31      | 第10回 (個々に)総括と今後の展望   |
| 2019/3/25      | 第11回 学長報告会   |

研究概要



上——ワーキングの様子  
下——学長報告会の様子

する。これに対して質疑応答や議論を発展させる。資料や議事録をまとめ、今回活用したSlack上でタイムライン形式のアーカイブをおこなった。

ミーティングは全11回を数え、改革の最終目標が大学憲章・活動指針の前進であることを全員で確認するところから始め、以降はメンバー各人から、多種多様な視点での提案がなされ、質疑応答を繰り返すことで将来構想への想いや具体的なアイデアをメンバー全員で共有した。これらは互いのデザイン教育思想の理解を深める有意義なプロセスとなった。

特に第4回以降は、個々の意見をデザイン教育、大学業務の大きく2項目に分けて議論を進めた。デザイン教育においては、ゼミ制に関して活発な議論がなされた。大学業務については、運営業務に関する合理化について初めて本格的な検討を行い、改善項目が合意されたことは大きな成果であった。これら成果の一部は実行計画に向けて引き続き調査を進めている。平成30年10月のデザイン科会議で中間報告とヒアリングを経て、年度末に学長に活動経過と個人の総括と展望を報告した。

## 欧州デザイン系大学の实地調査

欧州のデザイン系大学における教育体系と施設調査のため、事前に各所にアポイントを取り、有力大学をピックアップした。ベルリン国際応用科学大学の阿部雅世教授やリンシェーピング大学カールマルムステン家具研究コースの Leif Burman 教授にアドバイスを請いながら、調査対象を精査していった。そこで今回は、現在世界ランキング1位のデザイン系大学で知られるスウェーデンのウメオ大学UID (Umeå Institute of Design) など教育水準の高い北欧諸国を中心に、スウェーデンやフィンランド、デンマーク、技術力のあるドイツの4カ国、7大学を訪れることにした。調査期間は、2018年10月29日～11月2日。本特別研究からは、根

来准教授が訪問した。常に魅力的なデザインを生み出し続けている欧州。そのベースとなっているデザイン教育やその設備について訪問してみて感じたことは、しっかりとした伝統に基づき、社会の要請に応えるべくして教育体系や時代に合わせたカリキュラム作り、技術の習得が行われている点である。どの大学も学部3年間にマスターコース2年間というパターンが多い。社会のデジタル化が進む中であっても、実際に手を動かすアナログ的な教育もしっかりと行っている点が興味深い。また、図書館や食堂などパブリックエリアや学生が自由に使えるキッチンなどのリフレッシュスペースも充実していたのが印象的であった。学生たちは、国連が掲げているSDGSなどの社会問題に対して具体的に自分の研究テーマを通して貢献している点も意味深いと感じた。





左上から、建物外観／工房ギャラリー／課題展示（ジグソー）／VRでモビリティのデザイン検証／コンピュータ教室（エイリアス、ライノセラス、キーショットなど）／演習教室／大型NCルーター（車が1台削れる）／図書室（視認性が高い）／食堂（工房ギャラリーに隣接）

## ウメオ大学

Umeå Institute of Design - a part of Arts Campus at Umeå University

<http://www.dh.umu.se/en/>

訪問：10/29(月)10時～16時、窓口：Pro. Demian Horst

スウェーデンウメオにあるUID（Umeå Institute of Design）は、現在世界ランキング1位のデザイン教育で名が知られている。2007年に校舎が新設され、教育環境も設備もとても充実している。ID教育に特化した最先端の大学である。自動車メーカーからの留学生も受け入れており、海外からの見学も多いらしい。大きくわけて、プロダクト系、モビリティ系、インタラクティブ系の3専攻があり、一クラス15人で、学部3年+マスター2年がセット。約半分の学生がマスターコースに進学、その上にドクターコースも設置されている。

基礎教育を大切にしており9時～16時までみっちり授業が組まれている。ハイスペックなマシニングやCADソフトを学ぶ前に、コピックレンダリング

やクレイワークなどの手を動かす基礎教育も学ぶのが、本学と類似する部分があり親しみがわいた。ただ、作品の完成度は非常に高い。工房には、車1台のモデルが切削できる5軸のNCルーターを始め、3Dプリンター、電子工作、木材加工、金属加工、など充実した設備が整っている。また、デザインフィロソフィーも大切にしている。工房のインストラクターは5人、テクニカルなことを指導する人が10人ぐらい、教員を入れて40名ぐらいのスタッフ構成で充実している。大手企業からの産学連携プロジェクトにも積極的に取り組み、注目されている。建築コースやファインコースも別校舎に併設されている。美術館も有名で、すべてが食堂や大講義室などの共有部分で繋がっている。



建物外観／1年生スツール課題展示／演習教室（デザインコース）／教室（椅子張りコース）／コンピュータ教室／キッチンスペース／木材加工室／木材加工室／集塵機

## リンシェーピング大学 | カールマルムステン家具研究コース

Linköpings universitet Carl Malmsten Furniture Studies

<https://liu.se/en/organisation/liu/iei/mlu>

訪問：10/30(火)9時～12時、窓口：Pro. Leif Burman

スウェーデンを代表する巨匠家具デザイナーのカールマルムステンが設立した学校である。2010年にキャンパスが新設された。ストックホルムから電車で20分ぐらいに位置する。元々市内にあったが移転し、カールマルムステンのメインオフィスの横に隣住民の寄付で校舎を新設した。また、リンシェーピング大学の傘下に入り運営形態は大きく変わったが、家具コースとして教育課程は独立しているため、学生のレベルは以前と変わらないとのこと。ヨーロッパでは、ウメオやアールトも同じで、総合大学の傘下に入るのがスタンダードになってきている。人間工学の授業などは、リンシェーピングから先生が来てくれるらしい。学生数65人、学部3年+マスター2年、キャビネット8人、デザイン10人、ファ

ブリック4人、半分の学生がマスターに行くそうだ。デザインとキャビネット（職人レベルを養成するコース）で工房が分けてある。目的が違うから共有は難しいとのこと。デザインは、プロトタイプ、キャビネットは職人レベルを目指している。機械メンテナンスは、1週間に一度掃除の日が決まっています。赤ランプが回るらしい。機械一つ一つに担当の学生が決まっている。集塵システムがよく考えられていて、掃除しやすい集塵ダクトが、部屋の床に設置されている。機械と機械の間が作業面と安全面が考慮されていて広くとっている。入学方法は書類、面接、デッサンの課題がある。現場での共創力を養わせるねらいで、キャビネットとデザインコースがコラボレーションして提案性のある作品を作る授業もある。



左上から、建物外観／展示空間／演習教室／コンピュータ教室／休息、キッチンスペース／ファブラボ3Dプリンター室／木材加工室／金属加工室／セラミック加工室

## スウェーデン王立美術大学

KONSTFAC University of Arts, Crafts and Design

<https://www.studyinstockholm.se/university/konstfack-university-college-of-arts-crafts-and-design/>

訪問：10/30(火)13時～16時、窓口：Pro. Leif Burman

スウェーデンの最高峰の美術大学で、2004年に新キャンパスが設立された。ストックホルム市内にある元携帯電話のエリクソンの工場をリノベーションしてできた校舎である。学内はヨナス先生が案内してくれた。設備は、共通で使えるところもあり、大学としてはボーダレスで、色々な専攻の学生が刺激を受け合えるようにと考えているらしい。一方で、それぞれの専攻で抱えている設備もあり、そこは他専攻の学生は勝手には使えないが必要な時にフォローする体制はある。学生数約900人、インダストリアル80人、インテリア80人、グラフィック80人、セラミック30人、ガラス10人、テキスタイル50人、ジュエリー、ファインなどのコースがある。マスターコースに半分の学生が進学する。ここも学部3年+

マスター2年のセット。インダストリアルコースの教員は10人、工房ごとに9時から16時勤務のインストラクターがおり、基礎教育、アナログ、デジタル、サステイナブル、産学連携プロジェクトを平行に学ぶ。具体的には、メソッド、3DCAD、マシニング、プロジェクトなど。工房は22時でメイン電源が落ちる。インストラクターがいない場合は、使える学生が3人以上いないと使えないというルールらしい。1年の始めに、使い方を学んだ学生のみ使用可能であり、ライセンスを取るとのこと。

教員のエフォートは、70教育、20研究、10事務。常勤の教員はいない。学生用のリフレッシュルームがあり、ミニキッチンとカウンターがある。集中と休息の切り替えの工夫を感じた。



左上から、建物外観／大講堂／椅子のコレクション／演習教室／教員研究室／木材加工室／木材NCルーター加工機／金属加工室／金属NCルーター加工機

## KDAK デンマーク王立芸術アカデミー

The Royal Danish Academy of Fine Arts Schools of Architecture, Design and Conservation

<https://kadm.dk/en/kadm>

訪問：10/31(水)9時～12時、窓口：Pro. Nicolai de-Gier、Pro.Kajita Masashi

コペンハーゲンにあるデンマークを代表する王立の建築&デザイン大学校。案内をしてくれた Pro. Nicolai de-Gier は建築、家具が専門。Pro.Kajita Masashi は、日本人で建築、空間が専門。本学の環境デザイン的な位置の専攻。インクルーシブデザインを建築をベースに研究している。ニコライ先生の紹介で今回偶然同行していただいた。校舎は、元々市内にあったが、約20年前に港の海軍の倉庫をリノベーションして大学に転用した。生徒数は約1500人、とても雰囲気のあるロケーションと建物である。建築、デザイン、クラフトなどがメイン。建築とデザインが被る専攻もあり梶田先生はそちらの専攻の担当。生徒数の分断を防ぐために、インダストリアルコースはもう一校別の大学に統合、クラフトのガ

ラスコースも別の場所にある。ファインコースは、市内の旧校舎に残っている。国からの要請に応えるべく、様々なプロジェクトに取り組んでいる。組織改編やキャンパス統合などで、芸能や音楽、ファッションなども取り込んで現在は総合芸術大学となりつつある。やはり学部3年+マスター2年のセット、ニコライ先生のコースだけで大学院生が80人いる。工房は、建築とデザイン、クラフトで分かれている。どこもそうだが、学年ごとの教室の壁がなく、学部からマスターまで同じフロアで行き来できる。1年の基礎授業では、構造や素材などの授業が多い。学生の教室のそばに、キッチン付きのパブリックスペースや小会議室がガラスで区切られている。椅子のコレクションが充実、美しく管理されていた。



左上から、建物外観／演習教室／作品展示／作品展示／ファッション教室／活版印刷室／木材加工室／ファブラボ（3Dプリンターなど）／セラミック加工室

## ヴァイセンゼー芸術大学

Weißensee Academy of Art Berlin

<http://www.kh-berlin.de/en.html>

訪問：11/1(木)14時～16時、窓口：阿部雅世先生

旧東ドイツ時代に作られたベルリンの国立大学で、バウハウスの教育理念を取り入れている点や設立の時期などが本学に非常に近い大学である。近年は、デジタル、ハイテク系の技術を使った研究プロジェクトや理化学研究所など他大学とのコラボレーションを数多く実施しており、グリーンラボという環境系の工房も立ち上げ注目されている。校舎の作りは、年月は経ってはいるが、リノベーションしながら大事に使っている印象を受けた。1クラス約20人。4年+マスター1年、プロダクト、グラフィック、ファッション、工芸、ファインコースがある。基本的に工房は、全専攻に開かれていて、伝統的なアナログ機械からハイテクな3Dプリンターやレーザーカッターまで揃っている。製本の工房があるのはドイツらし

い。中庭に面して、共通工房が機能別に1列に配置されており、外からガラス越しに、作業風景を見学できる。各工房にインストラクターが常駐している。最大の特徴は、バウハウスの教育理念である芸術の総合化を踏襲したカリキュラム。学生は最終的に専門コースを決めるが、最初の1年は、写真、タイポグラフィ、グラフィックデザイン、プログラミング、解剖学などデザインとアートに関する基本的な原則を徹底的に学ぶ。プロダクトの基礎課題は本学と少し似ているが、アナログとデジタルを組み合わせている点が参考になりそうであった。廊下の壁に卒業制作のパネルが展示されていた。中でも、トランスポートの研究が盛んに行われているとのことである。1/1の現物を制作することもあるようだ。





## アールト大学

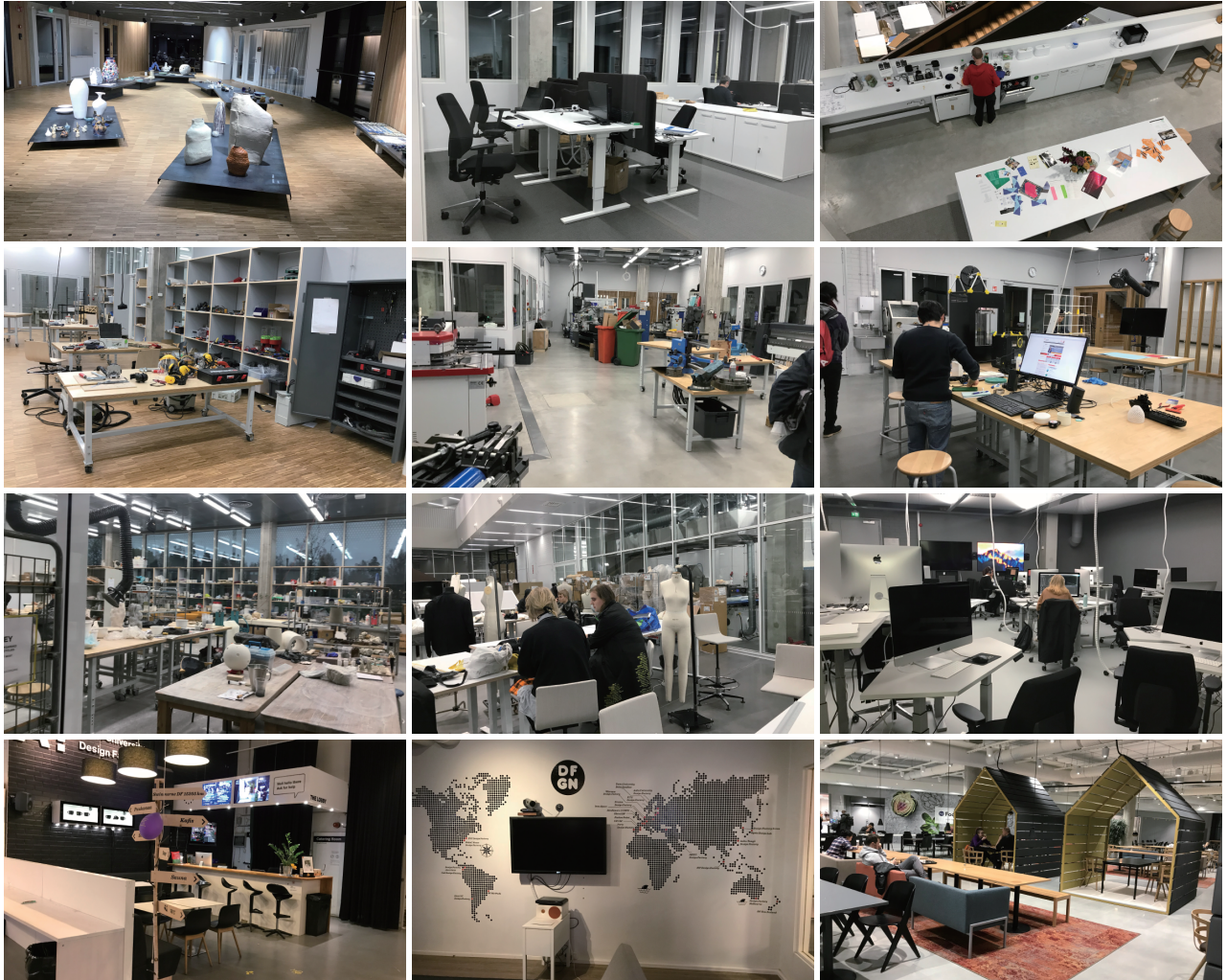
Aalto University School of Arts, Design and Architecture

<https://www.aalto.fi/school-of-arts-design-and-architecture>

訪問: 11/2(金) 14時~17時、窓口: 藤匠太郎さん、森山さん 九州大学からの留学生

フィンランドオタニエミにあるアールト大学は、2018年夏に新しくデザイン部門がオタニエミのキャンパスに移転したばかりである。元ヘルシンキ工科大学がアールト大学と改名し、デザイン科実習棟「バレ」が新設されアラビア地区にあった設備を移転させた。また、昨年11月に地下鉄が開通し、中央駅から15分で大学まで乗り入れている。ヘルシンキ空港も昨年新しく改装され、ヘルシンキの街自体大きく変化している。アールト駅には、学生が生活に必要な店やハイセンスな施設が全て揃っている。デザイン実習棟は、地下が工房、1階はエントランス、2階以上はフリーアドレス教室や展示スペース、パブリックエリアになっていて、学生達は決められたエリア内であれば、どこで勉強しても良い。建築、プロダクト、情報デザイン、グラフィック、セラミック、ファッションなどのコースがある。大学院生は各コース約15名である。日本の大学とは、京都工芸繊維大学、東京工業大学など工科大学系の連携が強い。工房は、全専攻共通で使えて全てガラス越し

に中が見える。ハイクオリティな機械と設備が充実。インストラクターも2~3人常駐。(9時~16時)インストラクターが、帰った後も学生が使える機械は自己責任で使用可能。引っ越したばかりで全てが新しい。セラミックなど技術指導が伴う工房は、勝手には使えない。建築コースは別の棟にあり、工房も別になっている。産学連携事業を全面的に支援するような施設や設備として、デザインファクトリーやスタートアップサウナなどが充実していて、自由に制作に取り組める環境が整っている。また、プロジェクトの収入や実績をオープンに発表して、モチベーションを上げている。デザインファクトリーでは、入り口のカウンターでやりたいことに相談に乗ってくれる大学院生がいて、各工房やインストラクターに繋げてくれる。世界中のデザインファクトリーとテレビ会議で繋がれ、若いブレインが化学反応を起こせるような環境が整備されている。主体性を持って自分で動ける学生を育成できる場として、とても充実した環境が整っている。



左ページ、建物外観/フリーアドレススペース/アールトショップ  
 左上から、展示スペース/演習教室(全てスタンディングテーブル)/キッチンスペース/木材加工室/金属加工室/3Dプリンター室/セラミック加工室/ファッションスペース/コンピュータ教室/デザインファクトリー/テレビ会議スペース/食堂

## まとめ

世界中のデザイン系大学で教育のあり方が研究され、施設や設備の更新の現場を知った。今回の調査研究は新キャンパスへの移転計画が進む本学においてデザイン科のハード、ソフト両面を最善のかたちにするために役立てば幸いである。また、学内におけるワーキング活動は何か大きなことを決めることが目的ではなく、回を重ねながらメンバー間の相互理解や共感できる理念の醸成が実質的な収穫になった。これら2つの活動を進める過程で我々の教育方針の特異性が浮き彫りになり、他大学に適切なお手本がないことを気づかされた。ユニークなのである。

また、本学の行動指針やデザイン科カリキュラム・ポリシーを再認識する場面があった。それらが未だ陳腐化することなく普遍的価値があると確信できたことは嬉しかったが、一方で先人の功をそのまま引き継ぐだけでなく、目的はそのままに手段の改善が必要なことも実感した。デザインを取り巻く環境が大きく変化中、今後も本学のデザイン教育の本質を見失うことなく、その向上に寄与したい。

(きたむら・けんや | 環境デザイン専攻)

(むらやま・ひろこ | 大学院/ファッションデザインコース)

(ねごろ・たかなり | 製品デザイン専攻)

(さかの・とおる | 視覚デザイン専攻)

[2019年11月7日 受理]